

景觀公益論序章

高橋 英彦

はじめに

冒頭に結論を述べれば、良い景觀は公益にかなうものである。良い景觀とはいかなるものかについては、本論の中で論じていきたい。

景觀とは、一般論としては、私たちの視野の中の森羅万象である。一般論としては、とことわりを入れたのは、単に視覚のみに限るものではなく、それにともなう人間の五感ごとくが感じとるものをあわせて、景觀と考えたい。簡単な例をあげてみよう。風光明媚な眺めに見入るとき、そよ風の感触や溪流のせせらぎの音が、あるいは草の香が、視覚という独奏楽器を中心とする協奏曲のように心の琴線をゆさぶるのである。もちろん、いずれかの要素に不快感をとまなうと、その逆になってしまうこともある。

次に、私たちの語彙の中には、類似の言葉がいろいろとある。風景、風光、風光、景色、眺め、眺望など。それぞれに成立ちとニュアンスが少しずつ異なるが、これからの議論を進めるために、私が「景觀」を選んだ理由は、広辞苑の「自然と人間界の事とが入りまじっている視覚のありさま」という定義が端的に表現しているのと同じ思いからである。

景觀を形成する要素は、大きく分ければ、この地球の営みそのものと、その中のごく限られた歳月に人類が作ってきたものということになる。自然と人工であり、氷雪の高峰や極地あるいは大海原の只中のような純自然、都市建築の内部のような純人工の世界もあるが、私たちの日常の視界においては、両者の混合景觀であることが多い。たとえば山岳における山小屋やテントは人工であり、ビル街の並木（人工的に植えられたものでも、枝葉の繁みは自然の営みである）や根かたの雑草は自然である。そこにやって来る鳥や昆虫は自然そのものである。そして、人間もまた景觀を形成する重要な要素なのである。

一 景觀の心情的作用

ごく単純な言い方をすれば、景觀には、接するものの心に多様な影響を及ぼすという作用がある。

かかる心情的作用の中で、どんな景觀にプラスの作用を見出すことが出来るであらうか。ひとつは心に安らぎを与えるものである。もうひとつは、心をゆさぶり、精神を高揚させるものである。もちろん、この二つをあわせ有するものも多い。例をあげよう。

春秋の山。たとえばブナ林に分け入れば、誰しも本当に心地よく、野鳥の声などを聴きながら、日頃の憂さなど吹き飛び、心が静まるとともに、明日への活力が甦る。かかる効果を疑う人は少ないであろう。

砂漠と草原が入りまじるような荒野。ここでは、豊潤の土地に馴れた人間が心の安らぎを得ることは難しい。しかし、そのような一見荒涼の中で魂をゆさぶられることもある。

多くの人にとって、上述「ブナ林」のような文句なしに好ましい景觀よりも理解しにくいであらうから、事例で説明

したい。

「……そのほかは荒涼たる土地、それもといていは草原で、牧童が羊の群を追い、ときにはほとんど砂漠にちかい所もあった。北にはコーカサスの山並みが稜線を白く縁どられ、うす青く、ちょうど舞台の背景のようにそびえていた。これがアジアだった！」

この文章のちに探検家として生涯を過ごすスウェン・ヘディンの最初の東方への旅における車窓の眺めの描写であり、「私はすでにこの時、この果てしない荒野を愛し、後年いよいよ遠く、東方の奥地へとひかれるであろうわが身を予感した」とつづく。ヘディンは二二歳であった。

もうひとつの事例。

ある午後おそく、アラビア遊牧民の天幕に招かれ、茶（チャイ）をふるまわれた。まわりは半砂漠の草原である。「遙かな地平線までひろがる大地は、ようやく傾きかけた陽光の中に輝いていた。私は戻っていく都会の暮らしとの落差を思った。都会の緊張や興奮、甘美と怠惰に馴れてしまった私に遊牧民の厳しい暮らしは耐えられないだろう。」これは、およそ二五年前、イラクに在勤していた私の休日の記録である。いわばつかのまにのぞいた日常とかけ離れた世界。そこでは、昼には摂氏五〇度にもなり、夜はしんと冷えこむ恵みうすい自然の中での、私たちの想像を越えた営みが何千年も繰返されている。私は、落日を背に黄金色の砂塵をあげて帰って来るラクダの群に感動をおぼえ、日常見馴れたものに違いないこの光景を、うっとりとして、いかにも好ましそうに眺めている天幕の古老の姿に、感慨ひとしおであった。このような景観を日常とする彼と、非日常である私とが、氣持を分かちあえたのである。

荒野の景観にも、安らぎとか氣持の高揚をもたらす効果がある。

ところで、スウェン・ヘディンが最初の東方への旅によってアジアの奥地を目ざす探検家になった背景には、少年時代からの夢がある。ヘディンは、一二歳にして天職を見いだしたと書いている。そして、そこには生まれ故郷ストック

ホルムに立寄った極地探検家の存在があったが、それ以上に彼を取り巻いていた北欧の風土が影響しているように思う。風土の具体的表現の中心には景観がある。

人は、成育期のさまざまな経験の中から、将来の道を見いだそうとする。そのような経験の構成要因に風土があり、景観がある。

やや感傷的な言い方であるが、ランドセルを背にした登校下校の道から眺める山野は、少年少女の心に生涯忘れないものを残しているであろう。それは懐旧の情だけではなく、本人が意識しないもの、少し大袈裟な言い方であるが、人格形成にもかかわる何かをとまなうと思う。東京で生まれ育った私には、そのような山野、石川啄木が「汽車の窓はるかに北にふるさとの山見え来れば 襟を正すも」とした、そして「ふるさとの山はありがたきかな」との思いをこめたような山野の記憶がない。それでも、当時はまだ少なからず、武蔵野の面影をとどめていた校庭の櫟の太木が風にざわめいていたことなどを思い出す。

「村の正面には田園や遠い村をへだてて月山がそびえ、北の空には鳥海山が見えた。村のそばを川が流れ、川音は時には寝ている夜の枕もとまでひびいて来た」、と藤沢周平は庄内のふるさとを描き、こうつぶけている。「私はそのような村の風物の中で、世界と物のうつくしさと醜さを判別する心を養われ、また遊びを通して生きるために必要な勇気や用心深さを身につけることが出来た。私はそういう場所から人間として歩みはじめたことを、いまでも喜ばずにいられない。」

ふるさとの風土と景観なしに歌人としての啄木、小説家の藤沢周平の誕生は考えにくい。

日本とフランスの、二人の登山家の文章を例にとってみよう。

「私は北国の或る片田舎の農家に生まれた。私の生家は村の東北に位する最も山を見るに好都合な地位にあって、毎朝、顔を洗ひ東の方を仰向く途端に、いつも白雪を戴いた日本アルプスの連嶺を見ることが出来た。」

これは日本登山界の草分けのひとりである田部重治の富山平野のふるさとの回想である。そして、山とともに、子供の頃から川の尽きない流れを不思議に思い、「これが山の間から湧く」と聞かされて、その有様を見なくてはならないと心に決めた⁽³⁾と書いている。

「私はマルセーユ生まれだった！そして生まれ故郷プロヴァンスのサント・ボームとリュベロンの丘陵、それに海辺のカランクで、風と大空、星と嵐、花と森など、こころしたすべてのものの香と風情への愛は芽生えたのだった」と、ヨーロッパ・アルプスの北壁やヒマラヤに輝かしい足跡をとどめているガイドのガストン・レビュファは述べている。⁽⁴⁾

この二人と似たような少年少女時代の経験をした人の数は決して少なくないはずである。もちろん大部分の人は登山家にはならない。あるいは文章を残したり、詩を書いたりはしない。しかし、どのような道を歩もうとも、そのような経験は心にしみ入る豊かな思い出としてとどまり、おそらく自然や人に対する態度にも、好ましい影響を与えつづけるであろうと思う。

そのようなことを考える論拠は人間の本性の中にある。

人間は、生まれながらにして詩人、音楽家、画家であり、それがさまざまな人生経験の中で枯渇していくことが多い。しかし、枯渇しきってしまうことはない。そのような意味のことを、サン・テクジュベリが書いていると、少年時代に読んだ記憶がある。正確な記憶ではないが、ビジネスマンや国際公務員などの、詩情とはかけ離れた世界の職業人としての歳月の中で、この言葉の意味は正しいという思いを強くしてきた。それは理論ではなく、私自身の心情や友人知己の言動の中からの実感である。さらに、勤務地であった中東やアフリカで、有史以前の人びとの営みの中の、土器の紋様や洞窟画などに接して、古代人が抱いていた美しいものへの愛着の情を知り、人間に本質的に備わるものとしての詩情を汲み取ったのであった。

ここで、ちよつとくどいようであるが論点を明確にするために繰返すと、人びとの心のあり方に、環境・風土・経験

などがさまざまな作用をする。そして、それらの主要な構成要素として景観が存在するのである。

二 風土と気質

次に、このような個人についての記述から議論を発展させれば、しばしば論じられる「風土と気質」という課題に結びつく。この場合、気質の持主として対象とされるのは、集団である。集団とは、民族や部族であったり、ある地域の住民であったりする。

「雪国の人は重厚で忍耐強い」とか「南国の人は明るく、樂觀的である」というような比較論的な性格づけは、一般的にごくすんなりと口にされ、受入れられている。深く詮議されることもない。

また、昔から旅行者は旅先の土地柄と人びとの気質のことを、紀行の中で論じている。

「スペインと聞いて、官能的なイタリアのように、人を悦楽へと誘う魅力がいたるところに散り敷かれた、なまめかしい南国を想像される方が多いのではなからうか。しかし、実際はその反対だ。」「スペインの風土の大半は、このように叢林も森もない荒れ地で、農耕地と名のつくところさえ、田園的魅力に欠けている。しかし、いっさいの虚飾がそぎ取られた自然は、すがすがしいまでに妥協がなく、峻厳だ。それが、そこに育まれたスペイン人の国民性のもつ高貴さの原質に通じている。」「ワシントン・アーヴィングは「アルハンブラ物語」の中で、そのように述べている⁵⁾。

アーヴィングは、一八二九年のスペインの風土の中に身を置くことによって、彼らの「誇らかな、屈強な、質実な、禁欲的な気質」を、深く理解できるようになったと考えたのである。また、アーヴィングのような北方の人間が、イタリアについて抱いていた風土的通念も、上述のようなものであったと知ることができる。しかし、私は アーヴィング

の景觀についての記述は見事さに感心しつつ読んでも、氣質については「スペイン人のただ中に身を置いて」という経験と、鋭く好意的な觀察眼から、そうとうに的を得ているのだらうと想像するしかない。

外国の風土論というものは、注意深く接しなくてはならないと考える。

昭和初期、欧州航路の船客であつた和辻哲郎は、アラビア半島の南端に近い今日のイエメンの港アデンにおいて、「尖つた、荒々しい、赤黒い岩山」の「陰惨な風景」を目のあたりにして、アラビアの乾燥した風土について思いをめぐらせた⁽⁶⁾。

そして、かかる乾燥地帯に生きる人びとを、すなわち「沙漠的人間」と定義して考えるのである。

そこでは、「一切の生氣、活力感、優しさ、清らかさ、爽やかさ、壮大さ、親しみ等々は露ほども存せず、ただ異様な、物すごい、暗い感じのみがある。」そういう土地においては、「青山ある土地」から来た人間は、「明白に他者を見いだす」という。すなわち、「外なる自然は死の脅威をもつて人に迫るのみであり、ただ待つものに水の恵みを与えるということはない。人は自然の脅威と戦いつつ。沙漠の至宝なる草地や泉を求めて歩かねばならぬ。そこで草地や泉は人間の団体の間の争いの種となる。（創世記一三六、二六）すなわち人間は生くるためには他の人間の脅威とも戦わねばならぬ。ここにおいて沙漠的人間は沙漠的なる特殊の構造を持つことになる。」その第一は「人と世界との統一的なかわりがここではあくまで対抗的、戦闘的關係として存する」ことだという。また「自然に対して人間を、あるいは人工を、対峙せしめる態度」をとることだとする。

和辻の見解には、私には及びのつかない洞察力がこめられていることは疑いない。その一方で、批判や反論が多々あることも承知している。

私は、ここでは、私自身の体験にもとづいて、考えることを述べるにとどめたい。

和辻が景觀としてあげているのは、アデンの海上から眺めたアラビアである。そのアラビアは、私がその土を踏んだ

アラビアとは、いささか隔たりがあるように思える。たしかに、四季の区分が明らかな豊潤の土地からの訪問者にとって、砂漠は一見して荒涼たる天地である。今日、東方からの空路で、インダス河畔の淡い緑の縁をあとにすれば、イランへと眼下には無限の広さに思える、渺渺たる砂漠と荒々しい禿山がうちつづく。その眺めからは生命の営みすら、かき消えている。

ところが、イランであれ、アラビア半島であれ、そこに分け入ってみれば、砂地の大砂漠はいざ知らず、多くの砂漠地帯にも生命があり、オアシスの緑のカーペットも見られる。人口密度こそきわめて低いけれど、接してみれば親しめる人びととの出会いも少くない。さきに述べた遊牧民の天幕のひとときに経験したように、敵対する者ではない限り、外来者に対するホスピタリティは伝統的なものである。天幕だけではない。町や村での経験も、たとえば突然、身も知らぬ家庭に昼食に招き入れられてしまうということさえ、一度や二度ではなかった。

砂漠と、淡いながらも緑のある自然と人工が織りなす景觀には、何かすっきりと割り切れた美しさがあり、そこに住む人びとの心に、和辻という戦闘的なものと、人間に対する深い親愛の情の融合をもたらしっているように思えるのである。

もちろん、砂漠や乾燥地の民とて一様ではない。景觀も一様ではないが、それ以外の風土や生活環境を形成するさまざまな要因、たとえば歴史背景、宗教戒律のあり方あるいはライフスタイルのあり方などによって、集団としての気質または気質の表現もいろいろと変化する。

また、アラブの国でも、和辻はエジプトについては、古来の文明はナイルの増水に対する「受動的な関心」を中心に発達したものであり、エジプト人は、「外に対しては意志的、戦闘的であり得ても、その日常においては静観的・感情的」としている。

これに対し、私が四年近くを住んだイラクのチグリス・ユーフラテスのほとりは、同様に大河の増水が、たとえば聖

書のノアの方舟説話に語られるように古今の風土形成の大きな要因であったが、靜觀的・感情的であるよりも、灌漑によって大地と取組んできた逞しい、農民的能動性が強いように思えるのである。

なお、和辻の記述の中では、「沙漠」よりも、インドなど南アジアのモンスーン地帯の氣質論のほうが、そこに住んだ者のひとりとして、なるほどとうなずかされるのである。そのことについては別の機会に論じてみたい。

ともあれ、南アジアの自然、人工、人間の織りなす風土は、なんとも多彩多様である。数多くの人との仕事の上では大きな困難もともなうような接点において知覚し得た心情的色どりも、多彩な魅力に富んでいる。インド人についてひとつだけ触れれば、彼らにはヒンドゥ教説話にあらわれるような、奔放にして無限に広がる想像力が備わっているようだ。インドの景觀を含む風土と、その中の宗教が、たがいに作用しあつて形成したものではないだろうか、と思う。

二 二 良い景觀について

良い景觀とは、ひと言で言い表すなら、前述したように人びとの心情にプラスの作用をする景觀であり、それは安らぎとか精神の高揚としてあらわれるものである。

景觀の構成要素に自然、人工、そして人間があることは前に述べた。

その中の自然そのものについては、多言を必要としない。それは、人類のみでなく、あらゆる生物を育ててきた搖籃であり、生物もまたその一部である。人間は、花咲く野にも草枯れる野にも、緑したたる森にも葉の落ちた樹木にも、聳え立つ岩の峰にもゆったりと横たわる山容にも、波穏やかな水面にも波浪渦巻く海原にも、きらめく星空にも稲妻走る夜空にも、それぞれに心をゆさぶられる。また、懐かしさをおぼえる。おそらくそれは、そういう森羅万象が人類を

育ててくれたものだからであり、原人であろうと、石器時代人であろうと、そのような景観の中で過ごしてきたのである。

一九七六年、アフリカ大地溝帯の北端に近いエチオピア東北部で、今から三〇〇万年から四〇〇万年昔に生きた、ヒトの祖先のものと考えられる化石が発見された。発見者である人類学者たちは、この骨から推定して小柄であったそのヒトに、ルーシーという愛称を与えた。それは、発掘隊が寂寥のキャンプの夜に聴いたビートルズの「ダイヤモンドの空のルーシー」に由来するという。

この挿話から思い描くのは、ルーシーと名づけられたヒトが夜ごと仰いだ星のきらめきであり、発掘隊の人びとがビートルズを聴きながら、ふと仰いだ星のまたたきである。星空によって、二〇世紀の人類学者の心情は、三〇〇万年から四〇〇万年昔の人類の遠祖と考えられるルーシーとの距離を大きく短縮したのではないだろうか。

いずれにせよ、自然景観は人間本能と潜在的に強く作用しあうものと考えていいであろう。

「そのぐるりは、まあ日本でいちばんすぐく、そしていい岩山だし、高さも二五〇〇米以上はある。これほど高く、自由で、感じのいい泊り場所はめつたにない。人臭くないのがなによりだ。」これは、序文に「大島亮吉君は山に生き山に逝った」と横有恒が記した若くして世を去った登山家の「涸沢の岩小屋のある夜のこと」という、文字どおり青春を思わせる叙事文の冒頭の部分である。⁷⁾ 人工を感じさせない岩小屋の夜の四人の若者の語りあいがつづられている。そして、「かずかずの星辰は自分たちにある大きな永遠というものを示唆するかのように、強く、燐らかに光っていた。ひとつの人間のイデーとひとりの人間の存在というようなものがおのずと対照として思われた。すると、その時だった。ふと夜空に流星がひとつとつと尾をひきながら強く瞬間的にきらめいて、なにかひとつの啓示を与えるかのように流れ消えた。」この文章は引用をここで切ってしまうのが惜しいようにつづく。

このような文章に接して思うことは、自然の景観と自然の中における人間の行為が、人の心に磨きをかけるものだと

いうことである。その意味で、自然は学校であり、学ぶ者の心のありかた次第で、無限ともいえる魅力を有する、厳しく優しい学校なのである。もちろん、青春と呼ばれる時代の、浪漫のかおりを感じさせる学校というだけではない。もっと幼い日々に、私たちは実に多くを自然と自然景観から学んできた。

さきに引用した藤沢周平の一文の「私はそのような村の風物の中で」の前に、こういう文章がある。「蛭がとび、蛙が鳴き、小流れにはどじょうや鮒がいた。草むらには蛇や蜥蜴も棲んでいた。」そして、こうも書かれている。「私は、いまの子供たちが、むかしの豊かさを失った自然にどんな気持を抱いているのか、またどんな遊びを喜んでいるのかを知りたいと、切実に思うことがある。」

人工景観あるいは人工や人間を点景とする景観については、人によっていろいろな思いがあり、そういう思いは議論を喚起するのである。

旅情の中の、いくつかの思いを引用してみたい。

「左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。是に稲つみたるをや、いな船といふならし。白糸の滝は青葉の隙／＼に落て、仙人堂、岸に臨みて立。水みなぎって舟あやうし。」

五月雨をあつめて早し最上川

言うまでもなく、芭蕉の『おくのほそ道』（萩原恭男校注 岩波文庫）からの引用である。五月雨降る山なみと最上川の眺めは自然そのものであるが、舟上にあつての景観には、人工が混じりあっている。

「まったく予期しない眺望の展開だったから、そのすばらしさにはただただ驚くばかりだった。足もとには松本平がひろがり、その西に連峰の中央の南の部分がのように立ちはだかつて、飛騨の秘境を隠している。雲の縞をつけた尾根や、一万フィートを超えるみごとな山々が、乳白色の夕空に紫の輪郭をくつきりと浮きあがらせていた。」

これは、日本の山旅の探検記によつて、ガウランドという造幣指導のお雇い外国人が名付けた「日本アルプス」を広

く世に紹介した英国人ウォルター・ウエストンの明治二四年（一八九一年）の槍ヶ岳へ向う紀行からの引用である。⁽⁸⁾上田盆地から松本平へと越える保福寺峠の眺望であるが、ちなみに、この旅は横川までは汽車、軽井沢まで鉄道馬車、上田まで汽車、そこからは人力車であった。

ウエストンが感動をこめて見とれた保福寺峠のパノラマも、主役は連なる山々であろうが、「足もとの松本平」は人びとの生活の営みに満ちており、またおそらく、より近い谷間の集落からあがる暮しの煙なども視野の中にあり、景観に和みを与えていたのではないかと想像する。

ところで、ウエストンはしばしば「絵のような」という表現をもちいていることに気づく。千曲川的情景の中で「かつては絵のような舟橋が兩岸をつないでいたところである。」木曾の旅で「上松は中山道沿いの絵に描いたような村」である。「村は犀川の広い流れの左岸にあつて、そこから絵のような谷間に入つてゆく。」くすんだ田舎家のそばの絵のような橋の下を、木曾川が流れてゆくのが見えた」などなど。

ウエストンが生まれ育つた時代は、ヨーロッパ・アルプスにおいて、ひたすらに恐ろしいもののみあつた山岳に美が見出だされ、彼自身もその申し子である近代アルピニズムが盛んになる時代であつたが、同時に風景そのものを絵画的な美の感覚のなかでとらえることがしきりに行われはじめた時代でもある。

「風景を愛でる心が生まれたのはこの時代である。」上記のウエストンの書の解説（青木枝朗）の中の、こういう書き出しの一節は、分かりやすく、印象に残る。「『風景、風景って言いますが、私たちの若いころは誰もそんなことは言いませんでした』——ある分別に富む老婦人の言葉を耳敏く聞き留めたところに、第一級の自然詩人といわれるワーズワースの真骨頂があつたといえるかもしれない。」

景観の詩情と絵画性には、もとより深いつながりがある。それは、おそらく——いや間違ひなく有史以前の人類の心情の中に存在したものであり、東洋人たると西洋人たるとを問わず、感性の中で意識的あるいは無意識的に味わつてき

たものであるが、文化的背景の相違がいくぶんか具現を、時代や表現において、異ならしめてきた。芭蕉の「花の雲鐘は上野か 浅草か」「雲の峰 幾つ崩れて 月の山」から私たちはまさに絵画的情景を目に浮かべることが出来る。万葉集や古い時代の中国においてもわかりである。杜甫の「花は遠し重重の樹 雲は軽し処処の山」(『中国詩史下』吉川幸次郎編 筑摩叢書)はまさに私たちの心情にある絵ではないだろうか。

少し本論を外れたが、ここで人工景観あるいは人工や人間を点景とする景観に論を戻したい。このような景観には、おのずからいくつかのパターンがある。人工度の高い、大都會の景観、人工は小さな点景であるほどに自然に恵まれた山里の景観など、両要素の割合によって、パターンには変化がある。

そのいずれであっても、良い景観として考えたいものには、私たちの心情に対する好ましい作用を内在するのである。人工的なもの、なかんずく建造物に焦点をあてて、景観上の好ましさを考えるとき、新旧という課題がある。

会津の大内宿や喜多方、東京から遠からぬ川越の蔵の町、木曾の宿場、飛騨の高山や白川郷、奈良や倉敷の町並みなど保存の指定を受けているものや、さほど世に知られてはいないものも含めて、日本には私たちの祖先の暮らしの営みを今に伝えてくれる、文句なしに素晴らしい景観が数多く残されている。また、古色漂う神社仏閣や古城の石垣、漆喰の白壁もまた日本の伝統景観に重要な位置を占めている。これらのものは、私たちの誇りであるとともに、心の襷にしみ入るような安らぎを与えてくれるものである。

もちろん、日本だけではない。洋の東西あるいは南北を問わず、人びとがそれぞれの文化文明の中で築き、暮らしてきたあかしを物語る建造物のすべてが、遺跡であろうと今なお人が住むものであると、心をゆさぶられるものの枚挙にいとまはない。そして、その多くが、私たちと同じ現代人の誇りである。いわずもがなの歴史の古い国だけではない。アメリカやオーストラリアの、古寂びた開拓時代の遺構にも、彼らの勇気や誇り、あるいは悲しみがしみついでいて、感動を与えてくれるものがある。

しかしながら、その一方で人々のライフスタイルの変化にもなつて、いや時にはそれをリードさえしながら、建造物の景観は変貌していく。

近代世界における変貌の特色は、トインビーが「いまでも世界は、西ヨーロッパを生まれ故郷とするところの西洋文明によつて発酵されつつあります」と述べているように、西洋化の波の中で進んできた。かつてロンドンやパリが手本であつたけれど、今ではそこでも「ニューヨーク化」が著しい。アジアにおいても、経済発展の度合を反映しつつ、国によつては、都市景観のそのような変貌の道を歩んでいる。印象としては駆けている。

このような都市景観の画一化を嘆く人もいる。性格喪失の大都会は、観光の対象として見るには値しないとまで言う人もいる。

けれども、明らかなことは逆戻りは不可能ということである。そうであれば、変貌の中における好ましい景観を見出すという積極的な姿勢が望ましい。「飛行機も自動車も電灯も、そして今耳を傾けているステレオも、現代の知恵者の素敵な贈りものに相違ない。鉄とコンクリート、アルミとガラスの街もだ。」これは二〇年前の私の文章である。勤務していたビルがあつた丸の内について、「かつて一丁倫敦と呼ばれた赤煉瓦は跡かたもない。新しいビルディング群が、朝陽夕陽に金属性の光沢を放ちつつ四角く並んでいる。」また、家の物干台に上ると見える新宿副都心については、まるでマンハッタンのようだと感じしつつ、夜空に星雲のごとく浮かぶ窓の灯の美しさについて記している。かかる人工景観に、皇居前の松の本立、丸の内のイチヨウ並木のような自然要素が加われば、心情的安らぎ感が倍加される。

さきあげたウエストンの、かつての絵のような舟橋の記述は、それが「橋桁を白く塗ったけばしい鉄橋」に置きかえられてしまったという慨嘆をともなっている。今日の私たちから見れば、その明治時代の鉄橋にも、おそらく周辺の自然に溶けこんだ風情を感じ、人によつてはさらに新式の橋に架けかえられたことを嘆くであろう。しかし、上田駅から遠からぬ、やや下流の千曲川を渡る長野新幹線の斜張橋を眺めたとき、私は文句なしに美を感じた。新しい土

木技術と、信濃の自然的景観の、見事な融合である。ただし、このことは舟橋というひとつの文化についてのウエストンの愛惜を否定するものではない。舟橋は、すこぶる好ましい景観の点景であつたに違いないのである。

人工と自然の融合という意味において、港は特筆してもいいであろう。なぜならば、その前面の視野の中の水面は、水平線の彼方へと広がる手つかずの海という大自然の縁にすぎないからである。臨海の開発がいかに進もうと、それは海のほんの端のことであり、開発の到達点から、いきなり魚棲む海がはじまるということが、海辺の景観に浪漫の情を与えている。正確に言えば、そのような景観に接する人間に、浪漫の情をおこさせる。芭蕉の「荒海や佐渡によこたふ天河」において人住む越後と、人住む佐渡の間に人工的なものは入らない。「暑き日を海にいたれり最上川」では、人的世界を流れて酒田に至る最上川が、ひたすらに自然そのものである海と一体を成すことに思いをはせている。

そのような海辺において人工と自然が織りなす景観には、漁港と商港があり、それぞれの歴史背景のある風情をかもしだしている。港の景観は、冒頭に述べたような人間の「五感」の敏感な反応を誘うものが多い。波の音がある。活気に満ちた人の声があり、エンジンの音、帆柱が風に鳴る音、カモメの音がある。潮の香があり、潮風の感触がある。水産物に視覚と嗅覚を刺激されて、食欲をそそられる。

港の景観にも、伝統的なものと新しいものがある。山と海との間に軒を寄せあう家なみと舳先を並べる漁船が作りあげる昔ながらの漁港の眺めがあり、港や水路ぞいに古い倉庫がずらりと並ぶ、これも歴史ある商港がある。そうした建造物には、往時をしのばせるにとどまるものもあり、酒田の山居倉庫のように、今も物流の役割を担っているものもある。一方、新しい港の景観にも、思わぬ詩情があり、絵ごころをそえられるものが多い。私自身、東京港の夕景に心をゆさぶられた。大きな船影、白波をけたてて近づく小型船、一日の役割を終えたクレーンの林。最近では港の入口を大きくまたぐ長大な橋のなめらかな曲線。精油所の小さな炎。いずれにも、多様な心情効果がある。

昔から、海洋や港は、そのさきにある海原の広がりによって夢を育んできた。「突堤へ行くね。遠くの空を眺めるだ

ろう。もうそれだけで、おれの魂は海の向う側に飛んで行つてゐるんだ。沖を走つてゐる船を見ると、綱か何かで、その船にぐんぐん引つ張られるような気がするんだ」とマルセイユの若者マリウスは恋人のファニーに語る。

もうひとつ人工と自然が織りなす代表的な景観には、田や畑がある。牧場がある。

なかならず日本の景観において水田が占めている位置は断然大きい。平野であれば見渡すかぎりに、山間であれば棚田を作つて、春には水面が光り、夏には輝やくような青に染まり、秋には黄金色に波うつのである。稲作が始められてこのかた、このような景観がいかに人びとの心情と深くかわりあつてきたことであろうか。藤沢周平の語る子供心に豊かさを抱かせた小川も蛙も鮒も蛇も、水田のたまものである。

水田と、その向うに見える鎮守の森の杉木立という景観がお祭りの囃子の音などとともに、村の子供たちの心にぎざみこんできた心情作用の大きさは、はかり知れないと思う。

これが西洋であれば牧場や麦畑の景観ということになる。「……白銀の水河とけし水清く 緑うるおし 羊群れ遊ぶ あしたに山々くれないに燃えて 夕べに鐘の音はひびく おおグンデルワルト」うろおぼえだが昔聴いたグリンデルワルターリードの日本語訳である。羊の群が家路を急ぎ、それも終わつて鈴の音が聞こえなくなる頃、夕方の栄光（アーベント グリュエーン）と呼ばれる残照に輝く山々を背景に、教会の鐘がなる。そんな景観を思う。あるいは、日本では「故郷の空」として知られるスコットランドの民謡の原曲で、若い男女が初々しい口づけをかわす麦畑の夕空の彼方に見える教会の尖塔から、やがて晩鐘が聞こえてくる。そういう景観に囲まれて、子供は育ち、人びとは喜怒哀楽の日々を過してきたのである。

この章のおわりに、景観の中の人についてふれたい。

景観の中にあつて、人そのものが果たしている役割が大きい場合がある。「朝の挨拶をすれば、（人びとは）かならずやさしい微笑とていねいなお辞儀を返してくれる。」「三々五々、村の小学校に通う子供たちが、誰にいわれたわけ

でもないのに丁寧にお辞儀をしてくれるのを見ると、日本はまだまだ文明化（ヨーロッパ化）されていないのだと、いまさらながら気づくのであった。「いずれもウエストンが訪れた山村の記述であり、外国人にとつての明治時代の日本の景観を快いものにしていた大人や子供の姿が浮かびあがる。幸いなことに、今日の日本でも、こういうことはまったく失われたわけではない。また、外国においても経験できる。私自身の中東における温いホスピタリティとの出会いについては前にも触れたが、そのような思い出が、その折々の視覚の中の景観に輝きをそえるものだということに気づく。

このような直接触れあう人ではなく、芝居の中の通行人のような、より視覚的な要素については、景観の点景としての色どりや適合性によつて、好ましいことも、あまり好ましくないこともあり得ると述べるにとどめたい。

四 景観の維持と創造序論

この章に進める前に、良い景観が有する効果のひとつとして、アメニティつまり快適さがあることをあげておきたい。ただし、これまでに述べてきた心情効果と必ずしも一致するものではない。たとえば、あまり快適とはいにくい嵐の空に心を高揚させる美しさがあり、雨の林には心を安らげるものがある。

純自然あるいは自然が主体をなす景観には、あるがままに保たれることが望ましいものが多く、そのことは自然保護と深くかわつてゐる。

日本のような平地の割合が小さい山国にあつては、手つかずの自然というものは、ごく一部の海辺や河原を除けば、山岳地帯に広く残されている。林業が盛んであつた往時や、石灰岩の採掘が山容まで変形させてしまった時代は去り、かかる第一次、第二次産業に比して第三次産業が国民経済に占める比率を大いに高めている今日においては、山岳の自

然を侵す行為の、ほとんどが観光を目的としている。林道として開かれたものが観光に開放されてさらに伸びたり、山腹を縦横にスキーゲレンデの縞が走っている。また、便利さが登山者の数を増やしつつ、高山植物の数を減らしているという。山麓や丘陵に残る自然についても、ゴルフ場の開発などが野生生物の存在に脅威を与えている。

このような問題を、ことの善悪で論じることが、必ずしも適当ではない。たとえば過疎化対策と自然保護のせめぎ合いに、どのように対応するのか。野生動物による果樹や野菜に対する被害についても、カモシカのような天然記念物とのかねあいをどう考えるのか。

後者について、アフリカのように人口増加が著しいところでは、問題は深刻である。たとえば、とあるケニアの山村の人がこう言った。「象もヒョウも、昔からの敵ですよ。象の群に歩かれるだけで、せつかく開いた畑が全滅です。ヒョウは私たちにとっても家畜にとっても恐ろしい存在です。それでも政府は、そうした動物を保護すると言うのです。」また、ある地方では、増えゆくマサイ族と保護されている象などの群の、ひとつの水場をめぐる争いがあり、政府は野生動物保護区であるがマサイ族とその家畜の群には午前中（あるいは午後）、野生動物には午後（あるいは午前）に水場を分かちあわせるといふ、妥協策を見出したことがある。

自然保護の大切さが普遍化する中で、人と自然の関係は、結局のところはバランスの問題になる。その場合、いわゆる開発行為よりも、個々人の生活問題が優先課題になるのは納得できることである。しかし、地元の経済の活性化であるとか、スキー場など多数が楽しめる施設との間をどのように調整するかは、所詮はこれまでどおり、個々のケースの検討によるしかないのであらう。一般論としていえることは、日本の場合、自然そのものの規模は人口比において大きくはないので、自然の変形をとまなわざるを得ない開発については、必要度についての従来以上の厳しい検討と、破壊程度の圧縮について企画・技術上の知恵が求められるのである。

とにかく、好ましい自然景観については、可能なかぎり、人工度低く、子々孫々に伝えたいということが、結論にな

る。

次に、人工景観についてであるが、まず建造物について考えてみたい。

「……どの家も豪壮ではあるが、それでも飛驒の白川郷や、越中五箇山に見られる合掌造りの男性的な、武骨一点張りの重圧感に比べると、棟のくし倉と称する千木や、煙出しや、かぶと造りと呼ばれる屋根の曲線など、むしろ女性的とでもいふべきほどに、優雅な構成であった」と、昭和四〇年の夏に訪れた庄内の朝日村田麦俣の家のたたずまいについて、画家向井潤吉は、画集『日本の民家』の中で記している¹⁰。また、同画集のあとがきに、「遠い祖先からの長い間の暮らしの知恵から考察された、その土地や自然の環境にぴたりと密着したような家や、木立や川や山のたたずまいを見出すとき、私は心の真底からワクワクとしてくる」と述べている。

向井画伯が夏の田麦俣を描いた「山間草炎」という絵は、説明にあるように「一見城砦のような外観をもっている家が、谷間に段をつくっている。」絵の中の六軒のどっしりとした茅葺きカブト造りの屋根のたたずまいが、まさしく、その土地や自然の環境にぴたりと密着している。

この絵が描かれてから三五年ののち、私が訪れた田麦俣は、大きく様変わりして新しい家がほとんどの中に、茅葺きカブト造りの屋根の家が二軒残されていた。一軒は多層民家として県の文化財指定を受けている。

このような変化は、高度成長期を経てライフスタイルが変わるなかで、各地で見られることである。そして、茅葺き屋根が消えつつあることなど、失われゆく伝統景観への愛惜の声も少なくない。

私は、そのような愛惜の気持を感傷的には理解しながらも、建造物なかならず暮しの場である家屋というものが、日常生活のあり方とともに変わることには至極あたりまえであり、さらに建材入手や職人を得ることも含む経済上の問題もあり、かかる景観の変化は、時代の流れの中で理解せざるを得ないものと考えている。そのような理解を前提として、たとえば田麦俣に残る見事な二軒に接するとき、向井潤吉が味わったようなワクワクする気持とは異なるが、大きな喜

びを禁じ得ない。それは、残されていることへの感謝の気持ちといっているであろう。田麦俣にかかわらず、町であろうと村であろうと、伝統的な建造物が保たれていること、ましてそこに人の暮しがあることには、景観上からも、深く感謝したのである。もとより、最近では町並み保存などが、観光資源となる場合も多いが、賑わいも景観の点景であり、それもまた保存の財源確保の意味合いも含めて結構なことと思う。

国によつては、事情が異なる。「山の急斜面の段々畑の中に五〇軒ほどの家が肩を寄せあう村へ出かけてみました。そして村に足を踏み入れたとたん、これはまるで生きている民俗博物館だ！と思ったのです。」一九〇年代のはじめ、インド在勤中のある休日を訪れたガンジス河源流に近いヒマラヤ山中の村についての記述である。（暮しの手帖―別冊私の旅の手帖 一九九五年版）石積みと大きな木材による横縞の美しい外壁は古くからの耐震構造であり、一階と三階には素朴で力強い彫刻のある木の柱が特徴の回廊が見られる。私は、こうも書いている。「今日、暮しのパターンの変化の中で、伝統が捨てられていくのが世界の各地で見られる現象です。それはそれでいたしかたないことでしょうが、私は古いものを守っている人びとに対しては、深い感謝の気持ちを抱きます。それは人類共通の宝だからです。」人口一〇億のインドにおいて、IT革命の波がいかに進もうと、ヒマラヤの山ふところの村の景観が変化するまでには、長い歳月がかかりそうである。ともあれ、その村からも仰げるヒマラヤの峰々と家屋群との景観の融合は、向井潤吉が記しているように心をワクワクさせるものであった。

建造物だけではなく、農耕牧畜漁撈および林業の世界にも、守られてきた伝統美の対象は数多い。その中でも、前にあげた水田は、私たちの宝だと考える。水田はいうまでもなく米を生産するところであり、今日、日本の米が直面している課題については、貿易自由化と穀物自給率の問題をはじめ、今後の世界動向ともかわることがらなど、考えるべきことが多い。しかし、ここでは景観論としての水田に焦点をしばらくしたい。

ひとつ数字をあげると、GDPに占める農業の比率は、全世界平均で四・八％であり、工業が三〇・六％、サービス

業が六二・一％である。先進工業国においては、農業比率は二％台、開発途上国平均でようやく一三％台である¹¹。しかしながら、全国、全世界という規模における視界を考えると、砂漠や水辺の世界を除けば、陸上における景観に占める広義の農業の営みの割合は有に六〇％から七〇％に達すると思われる。ことほど左様に、田や畑、植林などは、景観の主役なのであり、しかも前に述べたように「良い景観」の主役なのである。

その中であって、水田の眺めには前述のように、はかり知れない心情効果がある。それは、美しいというだけではない。貯水機能によって環境保全に貢献し、共同作業によって古来の民族性にも大きな役割を果たしてきたとされる。

日本の米どころといわれる平野においても、今では地域経済活動に占める農業比率は一〇％台がせいぜいであろうが、そのような土地の景観としての水田の大きさを考えるとき、守っている人びとに対し、やはり深い感謝の念を抱くものであり、かかる感謝の気持ちが広まることにより、国の政策などへの反映があれば望ましいと考えるのである。

このように、人工の伝統に根ざした「良い景観」は、感謝されつつ守られていくものであるが、一方においては、創造されるものである。水田にしろ、今では有形文化財などになっているような建造物にしても、もともとは、当時の高い技術によって造られたものである。（もちろん稲作など農耕はさらに技術上の改革が進められている）

前章でふれた超高層ビルや斜張橋も、静止したものではなくピカピカの船舶や車輛も、新しい創造物として景観の主役や脇役をつとめている。SLが走る眺めにも、新幹線が駆ける眺めにも、魅力を見出すことが可能である。

「かつて中世伽藍は白かった、なぜならそれは新しかったから。都市は新しかった。人びとは、都市をプランにより、すべて規則正しく幾何学的な部分から構成していた。切り出されたばかりのフランスの石は、白さに輝いていた、かつてのアテネのアクロポリスが白く眩ゆく、またエジプトのピラミッドの磨かれた花崗岩が艶々と光っていたように。」

フランスの建築家ル・コルビュジェは一九三五年のアメリカ訪問の印象記であり文化論である「中世伽藍が白かったとき」の冒頭に、そう記している¹²。「新しい世界が始まっていた。白く、澄明で、嬉々として、清潔で、明確で、逆行

でない新しい世界が廢墟の花のように開いていた。……そのころ伽藍は白かった。」

ここで、伽藍は単に寺院ではなく、幅広く建造物を語っている。また、この書の内容は決してアメリカ礼賛ではないが、二〇世紀前半のフランスあるいはヨーロッパのまどろみと対比している。また白く輝く真新しい伽藍は、言うまでもなく「煤で黒ずみ、長い年月によって腐食された」ものと対比されているが、それは文明の沈滞に寄せられた思いであり、古い景觀そのものの否定ではない。ル・コルビュジェの思考からは外れるが、この書を読んだ頃、ちょうど東海道新幹線が開通し、霞が関ビルにはじまったわが国超高層ビルの建設技術が、「マンハッタンのような」新宿副都心を造ろうとしていた。それらは、時代の精神的積極性の表現として気持を高揚させる景觀であった。かかる心の高揚効果の源には、創造にかかわった人びとの勇氣、知力、勞力への感動がある。古いものに接するときも同じである。ピラミッドやバベルの塔を築いた人びと、大仏います東大寺の伽藍を建てた人びと、寂しい入江に壮大な城郭をうち建て、前面を埋めたてつつ大江戸という新都市を出現させた人びとなどに思いをはせる。

かかる景觀の創造は、しかしながら、ル・コルビュジェがアメリカで見出したように、金銭上の動機づけによる景觀的な過ちにつながってしまう危険をつねにはらみ、それがかげがえのないもの、美觀や快適さの破壊者ともなるのである。高度成長時代、自然の中でも都市においても、景觀や環境に配慮のない開発をくいとめることは出来なかった。そして、昨今幸いなことに、人びとの心のゆとりが、心情的に好ましい景觀づくりへと少しずつ傾いている。ごく最近、テレビで見た小さな、そして好ましい話があった。東京深川の河川の淨化が、魚はもちろん、もはや郊外にしかないなくなったカワセミを棲みつかせたという。人間は、自然景觀すら、取り戻すことが出来るのである。また、たとえ自然を切り開いても、自然と調和しつつ新景觀を造る公園のような、好ましい開発例がある。（庄内に例をとれば、最上川畔の白鳥が舞い集う岸辺や、大いなる眺望を与えてくれる眺海の森などなどである。）

ここまで述べてきて、前に何度かふれた景觀の好ましい心情効果を前提として、もうひとつ重要な定義を行いたい。

すなわち景観とは文化である。文化には、絵画性や詩情、環境―自然環境と住環境、道徳性などが含まれ、過去と現在の経済や技術が大きく反映されるのである。

そして、かかる要素が一体となった景観を好ましいものとして保ち、創造することには高い公益性がある。

本論は、景観論の序論である。今後の展開は、方法論にふれなくてはならない。景観を守るにしろ造るにせよ、純粋な自然自体の変化を除けば、六〇億に達した人間は影響力の大きな行使者である。そして、ときには経済性という面では説得力に欠けるこの担い手を、さまざまなレベルで動かすものは国際世論であり国内世論である。したがって方法論としての世論形成も、ぜひ考えていきたいテーマである。

注

- (1) 山口四郎訳『探検家としてのわが生涯』白水社 一三頁
- (2) 藤沢周平『ふるさとへ廻る六部は』新潮文庫 五〇頁
- (3) 田部重治『山と溪谷』第一書房 二六頁、二八頁
- (4) 近藤等訳『星と嵐』白水社 一七頁
- (5) 平沼孝之訳『アルハンブラ物語』岩波文庫 一四頁
- (6) 和辻哲郎『風土』岩波文庫 五七頁

- (7) 大島亮吉『山、随想』 朋文堂山岳名著選書 一三〇頁、一四〇頁
- (8) 青木枝朗訳『日本アルプスの登山と探検』 岩波文庫 三二頁、三六五頁
- (9) マルセル・パニョル 永戸俊雄訳『ファニー』 角川書店 六〇頁
- (10) 向井潤吉『日本の民家』 保育社 二二六頁
- (11) 国連開発計画 Human Development Report 2000 邦訳 国際協力出版会
- (12) 樋口清訳『伽藍が白かったとき』 岩波書店 四頁